

2020 年 濱口梧陵国際賞受賞者

今村 文彦 教授



東北大学災害科学国際研究所 所長 津波工学研究分野教授

今村文彦教授は、30年以上にわたって津波防災・減災技術開発、津波数値解析、津波被害調査などを実施している。現在は津波数値モデル技術移転国際プロジェクト (TIME) 責任者として国内外で活動しており、特に、1992年ニカラグア地震津波以降の災害調査では、国際調査チームの中核役として災害実態の報告や復旧・復興への助言を行っている。津波に関する学术论文は英文・和文150編を超え、巻頭言・基調論文など多数の出版も行っている。また、国連提唱の「世界津波の日」関連の防災啓発活動も支援・推進し、過去400年間の世界での津波リスク評価を発表するなど貢献している。中央防災会議専門調査会委員、東日本大震災復興構想会議検討部会委員、国際測地学・地球物理学連合津波委員会副委員長などを歴任し、昨年8月より一般財団法人3.11伝承ロード推進機構代表理事を務めている。

Costas Synolakis 博士 南カリフォルニア大学教授



シノラキス教授は、1980年代後半に、勾配のある海岸への孤立波の遡上に関する解析解を発表した。その成果は孤立波の「遡上の法則」としてよく知られている。また、指導する学生と共に開発した MOST (Method Of Splitting Tsunami) モデルは、現在、米国立海洋大気庁および米国立気象局の津波警報センターが運用する標準的な津波浸水モデルであり、世界中で使用されている。近年では、フローレス (インドネシア、1992年)、スリランカ (2004年)、ジャワ (2006年)、アメリカ領サモア、サモア (2009年)、チリ (2010年)、メンタワイ諸島 (インドネシア、2010年)、日本 (2011年)、バル (インドネシア、2018年) の津波現地調査を主導して31冊の報告書を取りまとめ、津波防災の政策に大きな影響を与えた。さらに、後進の海岸工学技術者を育成するとともに、CNN、BBC、WSJ、ニューヨーク・タイムス、ワシントン・ポストなどのメディアを通して一般の人にも津波をわかりやすく解説している。

アチェ津波博物館 (インドネシア)



アチェ津波博物館は、2004年のインド洋大津波を忘れないための象徴として、また災害軽減のための教育センターとして設立された。インドネシア国内に400ある博物館の中から「2018年インドネシア博物館賞」に選ばれている。この博物館の最も重要な役割は、2004年の津波災害の経験を次世代に伝え、地震・津波災害から学んだ教訓を広く普及し、そして将来の災害に備えることである。地元や国内、国外からの訪問者は、常設・追悼展示や生存者からその経験や教訓を学ぶことができ、平日2,000~3,000人、週末には6,000人ももの若者や外国人を含む大勢の来場者が訪れている。震災についてあまり知らない若い世代の教育にも力を入れており、600の中学校の防災担当者に対して防災教育を実施している。また、この博物館は避難所としての役割も担っており、将来の津波に備え避難するための高台として設計されている。